

## 調査の概要

### (1) 調査の目的

- ア 国が、全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、各地域における児童生徒の学力・学習状況をきめ細かく把握・分析することにより、教育及び教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- イ 各教育委員会、学校等が全国的な状況との関係において自らの教育及び教育施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- ウ 各学校が、各児童生徒の学力や学習状況を把握し、児童生徒への教育指導や学習状況の改善等に役立てる。

### (2) 調査内容(教科に関する調査)

小学校：国語A・算数A(主として「知識」に関する問題) 国語B・算数B(主として「活用」に関する問題)  
 中学校：国語A・数学A(主として「知識」に関する問題) 国語B・数学B(主として「活用」に関する問題)

### (3) 調査対象

小学校第6学年・特別支援学校小学部第6学年(大阪府：1,021校 79,317人)  
 中学校第3学年・中等教育学校第3学年・特別支援学校中学部第3学年(大阪府：450校 63,845人)

学校行事等で後日実施した学校は、全体集計に含まない。

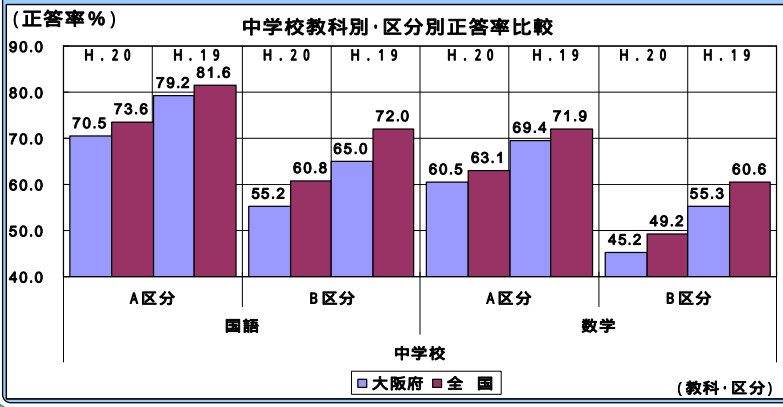
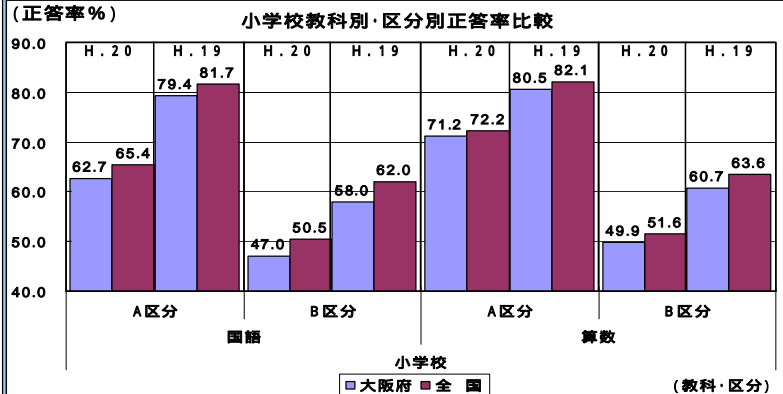
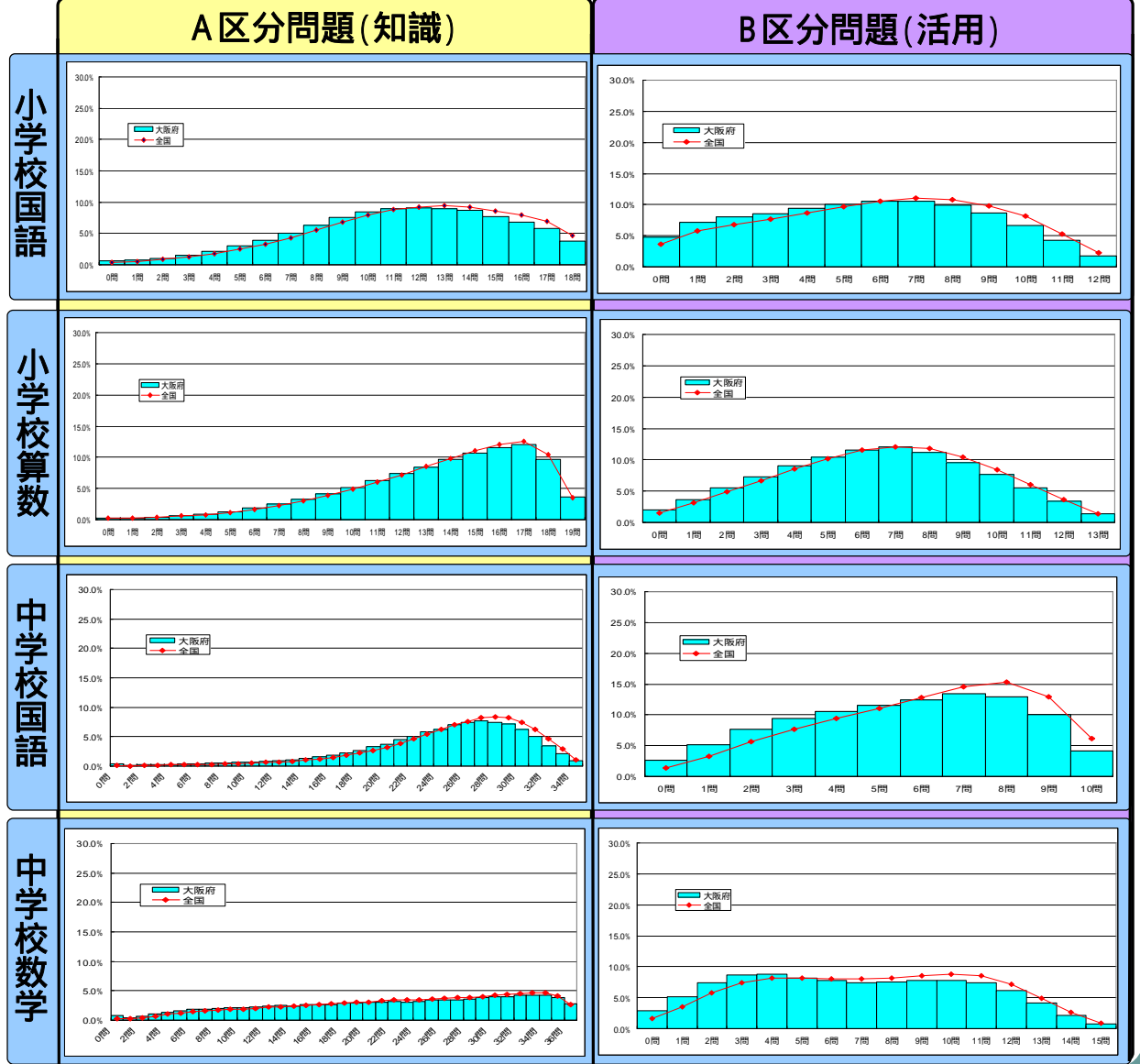
## 平成20年度調査及び結果の特徴

- ◆19年度と比べ、これまでの調査で課題の見られた内容の問題( )や解答に当たってより正確な理解が必要な問題が多い出題となっており、全体として見れば、19年度と比べやや難しい内容となっている。( )授業における具体的・体験的な活動を繰り返すことによって身に付けさせることが必要であり、指導の成果がすぐには表れにくいものと考えられる。
- ◆20年度調査は、19年度調査と比べやや難しい内容となっているため、単純な比較はできないが、19年度と比べ平均正答率が低くなっている。
- ◆今回出題された学習内容の知識・技能の定着に一部課題が見られる。
- ◆今回出題された学習内容に係る知識・技能を活用する力に課題がある。(文部科学省 調査結果のポイントより)

## 校種・教科・区分別正答率比較

		平成20年度			平成19年度			
		大阪府	全国	大阪府-全国	大阪府	全国	大阪府-全国	
小学校	国語	A区分	62.7	65.4	-2.7	79.4	81.7	-2.3
		B区分	47.0	50.5	-3.5	58.0	62.0	-4.0
	算数	A区分	71.2	72.2	-1.0	80.5	82.1	-1.6
		B区分	49.9	51.6	-1.7	60.7	63.6	-2.9
中学校	国語	A区分	70.5	73.6	-3.1	79.2	81.6	-2.4
		B区分	55.2	60.8	-5.6	65.0	72.0	-7.0
	数学	A区分	60.5	63.1	-2.6	69.4	71.9	-2.5
		B区分	45.2	49.2	-4.0	55.3	60.6	-5.3

## 正答数分布(横軸：正答数・縦軸：割合)



# 小学校国語

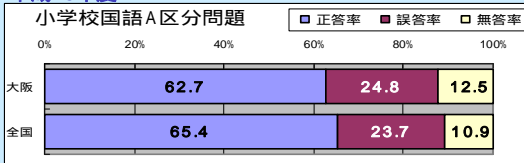
## A区分問題（「知識」に関する問題）

平成20年度  
全国学力・学習状況調査  
学力調査結果報告

平均正答率が62.7%であり、今回出題された学習内容の知識・技能の定着に一部課題が見られる

### 正答率比較 全体として見れば、19年度と比べやや難しい内容となっている

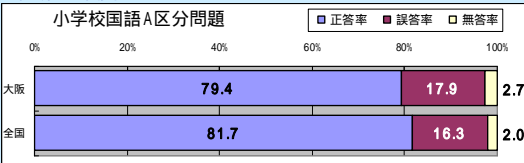
平成20年度（これまでの調査で課題の見られた内容やより正確な理解が必要な問題が多い）



●正答率においては、全国が65.4%であるのに対し、大阪府の平均は62.7%で、2.7ポイント下回っている。

●誤答率が1.1ポイント、無答率では1.6ポイント、全国を上回っている。

### 平成19年度

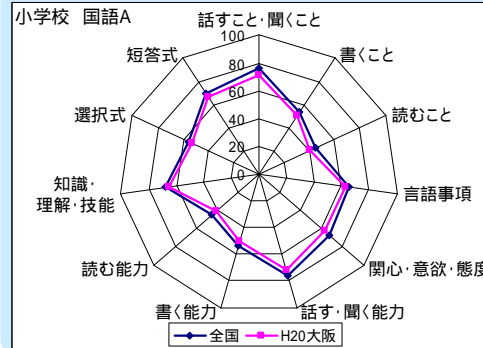


●今年度の調査においては、前年度と比較して、正答率、無答率で、全国との差は拡大した。

●前年度と比較すると、全国、大阪府ともに正答率で約16～17ポイント下回り、無答率では約9～10ポイント上回る結果となった。

### 領域・観点・問題形式別 領域・観点・問題形式別の状況は全国と同傾向

平成20年度 小学校国語A レーダーチャート



（「読むこと」・「書くこと」に課題）

●全体の傾向としては、全国の状況と同じであり、全国を示すラインのわずかに内側にラインを描いている。

●今年度の調査においては、「話すこと・聞くこと」「話す・聞く能力」については比較的良好であり、前年度とは逆の結果として表れた。

●一方で、「書くこと」「書く能力」では課題が見られ、このことについても前年度とは逆の結果として表れている。

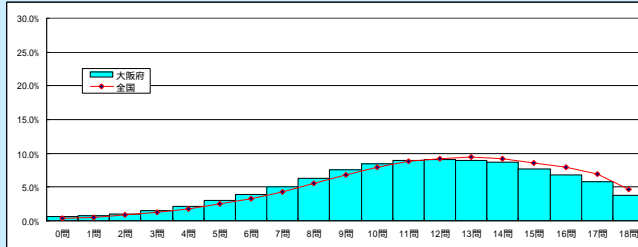
●また、「読むこと」「読む能力」については、正答率とともに約40%程度と、今年度においては全項目中で最も低く、課題となって表れた。

### 正答数分布

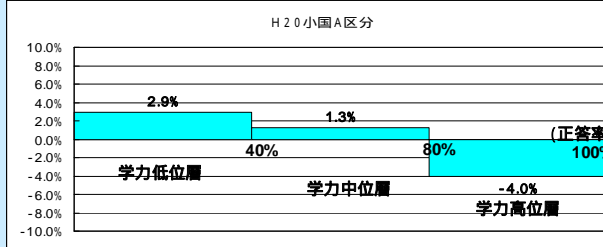
正答数分布の状況は全国と同傾向であり、全国との分布状況の差は平成19年度に比べ、学力高・低位層において縮まっている

（問題の難易度が高まったことを反映し、正答数の分布状況は、平成19年度と比較して、学力高位層から低位層まで拡散化の傾向が表れている）

#### 平成20年度 正答数分布



#### 平成20年度 正答率3層に見る全国との分布差

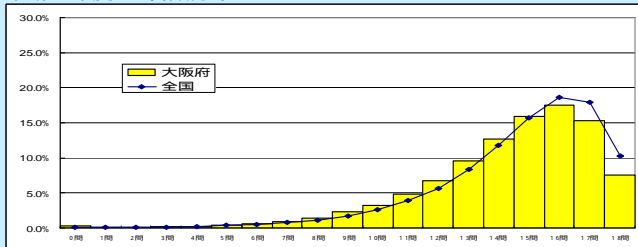


●A区分問題は総問題数が18問であり、全国においては、13問（100点満点換算で約72点）を頂点とするなだらかな山型を描いているが、大阪府では12問（100点満点換算で約67点）を頂点とするなだらかな山型を描いている。

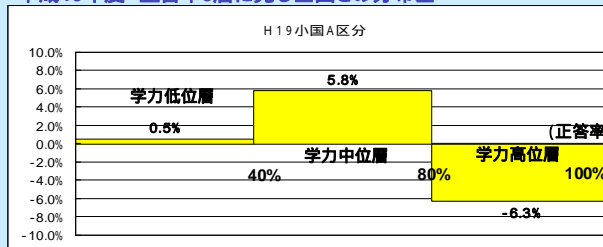
●前年度と比較すると、前年度は全国、大阪府ともに全18問中16問（100点満点換算で約89点）を頂点とする右寄りの山型を描いており、今年度の調査において大阪府は、低位層の方向に分布が拡散しているといえる。

●更に前年度は、全国、大阪府ともに14問～17問（100点満点換算で約77点～約94点）の間で、分布の割合がいずれの正答数でも10%を超えていたのに対し、今年度は、10%を超える分布は、全国、大阪府ともにみられない。

#### 平成19年度 正答数分布



#### 平成19年度 正答率3層に見る全国との分布差



●大阪府の正答数分布は、12問（100点満点換算で67点）以上で全国の状況を下回り、11問（100点満点換算で61点）以下で全国の状況を上回っていることから、全国の状況に比べると学力高位層が少なく、低位層が多いといえる。

●全国と大阪府の分布の差について学力を三層に分けてみると、正答数15問（100点満点換算で約80点）以上の学力高位層では、全国を下回る割合が2.3ポイント減少した。しかし、正答数7問～14問（100点満点換算で約40点～約80点）の間の学力中位層では、上回る割合が4.5ポイント減少し、正答数6問（100点満点換算で約40点）以下では全国を下回る割合が2.4ポイント増加しており、分布が低位層の方向へ拡散したことがわかる。

### A区分問題（「活用」に関する問題）にみえる課題等

#### 【書くこと】

目的や課題に応じて、グラフから分かったことや考えたことを書くことに課題がある。

#### 【読むこと】

目的や意図に応じて、段落の内容をとらえることに課題がある。

#### 【言語事項】

出題した漢字の読みについて、相当数の児童が理解している。

文脈に合わせて、同音異義の漢字を書き分けることに課題がある。

文の構成や表現の効果を考えて、正しく推敲することに課題がある。

# 小学校国語

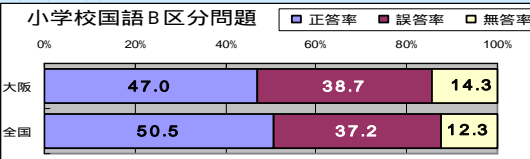
## B区分問題（「活用」に関する問題）

平成20年度  
全国学力・学習状況調査  
学力調査結果報告

平均正答率が47.0%であり、今回出題された学習内容に係る知識・技能を活用する力に課題がある

### 正答率比較 全体として見れば、19年度と比べやや難しい内容となっている

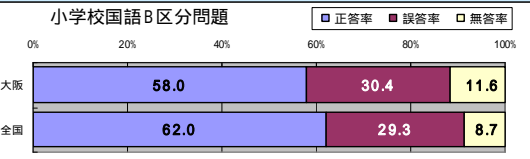
平成20年度（これまでの調査で課題の見た内容や、より正確な理解が必要な問題が多い）



- 正答率においては、全国が50.5%であるのに対し、大阪府の平均は47.0%で、3.5ポイント下回っている。

- 誤答率で1.5ポイント、無答率では2.0ポイント、全国を上回っている。

### 平成19年度



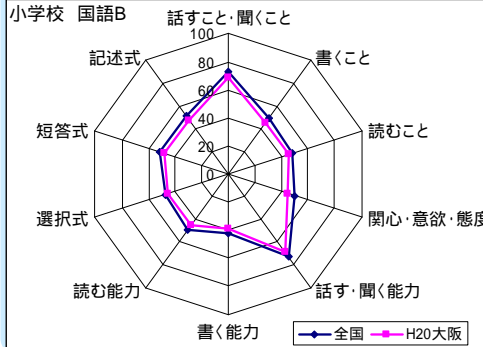
- 今年度の調査においては、前年度と比較して、正答率、無答率で、全国との差は縮まった。

- 前年度と比較すると、全国、大阪府ともに正答率で約11～12ポイント下回り、無答率では約2～4ポイント上回る結果となった。

### 領域・観点・問題形式別

領域・観点・問題形式別の状況は全国と同傾向

#### 平成20年度 小学校国語B レーダーチャート



（「読むこと」、「書くこと」に課題）

- 全体の傾向としては、全国の状況と同じであり、全国を示すラインのわずかに内側にラインを描いている。

- 今年度の調査においては、「話すこと・聞くこと」「話す・聞く能力」については比較的良好であり、前年度と同じ傾向である。

- 一方で、「書くこと」「書く能力」「読むこと」「読む能力」「記述式の問題」では課題がみられ、このことについても前年度と共通する部分が多い。

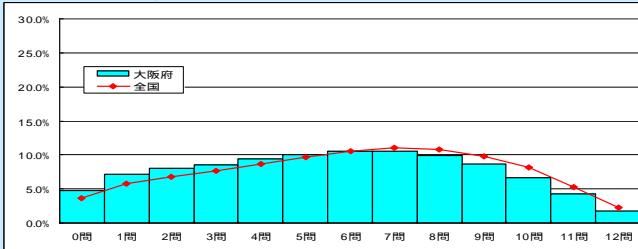
- 特に「書く能力」では、正答率が38.7%と40%を下回る結果となっており、課題が大きい。

### 正答数分布

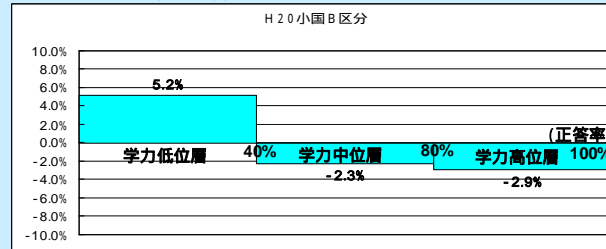
正答数分布の状況は全国と同傾向であるが、全国との分布状況の差は平成19年度に比べ、学力高位層で縮まり、低位層で拡大している

（問題の難易度が高まったことを反映し、正答数の分布状況は、学力低位層で平成19年度の状況を上回っている）

#### 平成20年度 正答数分布



#### 平成20年度 正答率3層に見る全国との分布差

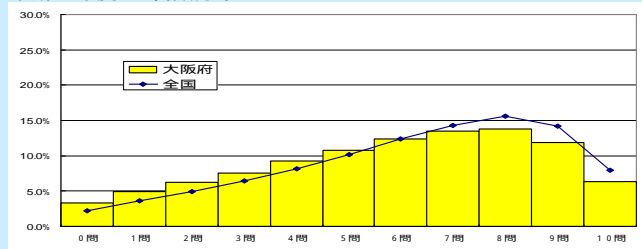


- B区分問題は総問題数が12問であり、全国においては7問（100点満点換算で約58点）を頂点とするなだらかな山型を描いているが、大阪府では6問（100点満点換算で約50点）を頂点とするなだらかな山型を描いている。

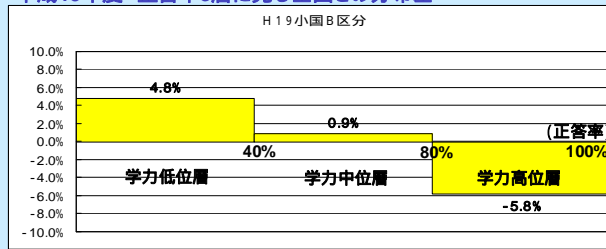
- 前年度と比較すると、前年度は全国、大阪府ともに全10問中8問（100点満点換算で約80点）を頂点とするなだらかな山型を描いており、今年度の調査において大阪府は、全国に比べ一層低位層の方向に分布が拡散したといえる。

- 更に前年度は、5問（100点満点換算で50点）以下の分布の割合が、全国で35.5%、大阪府で42.0%であったのに対し、今年では、6問（100点満点換算で50点）以下の分布の割合が、それぞれ52.9%、58.4%と、ともに全児童の過半数以上が分布している。

#### 平成19年度 正答数分布



#### 平成19年度 正答率3層に見る全国との分布差



- 大阪府の正答数分布は、7問（100点満点換算で約58点）以上で全国の状況を下回り、6問（100点満点換算で50点）以下で全国の状況を上回っていることから、全国の状況に比べると学力高位層が少なく、低位層が多いといえる。

- 全国と大阪府の分布の差について学力を三層に分けてみると、正答数10問（100点満点換算で約80点）以上の学力高位層で全国を下回る割合は2.9ポイント縮まり、正答数4問（100点満点換算で約40点）以下の学力低位層においては、全国を上回る割合が0.4ポイント拡大した。

### B区分問題（「活用」に関する問題）にみえる課題等

#### 【話すこと・聞くこと】

話し手の意図を考えながら、反応を示したり内容を深めたりして聞くことを更に身に付ける必要がある。

#### 【書くこと】

目的や課題に応じて、グラフから分かったことや考えたことを書くことに課題がある。  
目的や課題に応じて必要な情報を取り出して、条件に即して書き換えることに課題がある。  
意見文における冒頭と結びとの関係をとらえることに課題がある。

#### 【読むこと】

登場人物の特徴や心情、場面の様子をとらえることに課題がある。  
資料から必要な情報を関連付けて取り出し、整理することに課題がある。



# 小学校算数

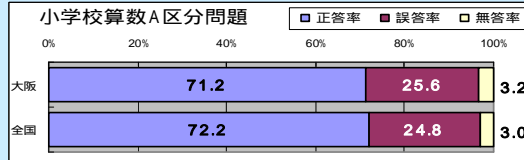
## A区分問題（「知識」に関する問題）

平成20年度  
全国学力・学習状況調査  
学力調査結果報告

平均正答率が71.2%であり、今回出題された学習内容の知識・技能について更に身に付けさせる必要がある

### 正答率比較 全体として見れば、19年度と比べやや難しい内容となっている

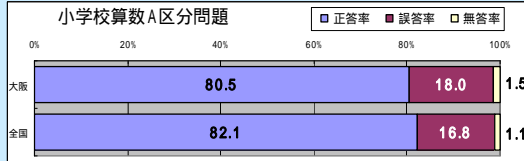
平成20年度（これまでの調査で課題の見られた内容・より正確な理解が必要な問題が多い）



●正答率においては、全国が72.2%であるのに対し、大阪府の平均は71.2%で、1.0ポイント下回っている。

●誤答率で0.8ポイント、無答率では0.2ポイント、全国を上回っている。

### 平成19年度



●今年度の調査においては、前年度と比較して、正答率、無答率で、全国との差は縮まった。

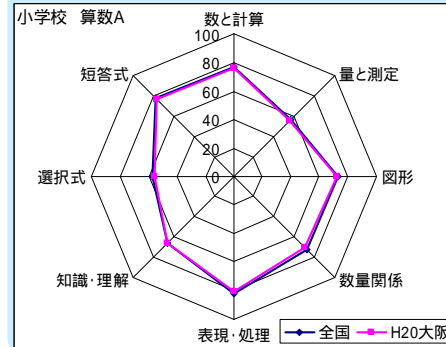
●前年度と比較すると、全国、大阪府ともに正答率で約9～10ポイント下回り、無答率では約2ポイント、誤答率では7～8ポイント上回る結果となった。

### 領域・観点・問題形式別

領域・観点・問題形式別の状況は全国と同傾向

平成20年度 小学校算数A レーダーチャート

（「量と測定」「知識・理解」に課題）



●全体の傾向は、全国の状況と同じであり、全国を示すラインとほぼ重なるようにラインを描いている。いずれの項目も、全国の状況との間に差はみられない。

●今年度の調査においては、「数と計算」「表現・処理」で正答率が約80%と、他の項目に比べて良好な状況がみられる。

●一方で、「量と測定」「知識・理解」では、正答率が約60%と他の項目に比べ低く、課題がみられる。

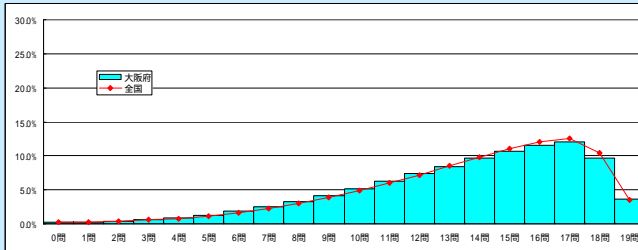
●前年度と比較すると、今年度の調査では、各項目ごとの正答率に差が生じているが、全国との差は縮まったといえる。

### 正答数分布

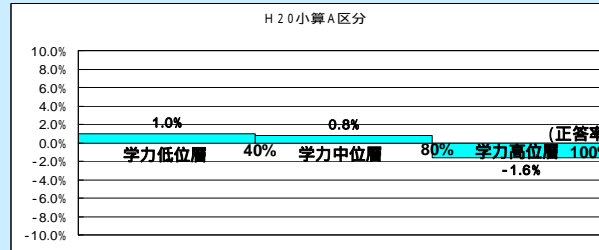
正答数分布の状況は全国と同傾向で、全国との分布状況の差は平成19年度に比べ、学力中・高位層で縮まる

（問題の難易度が高まったことを反映し、正答数の分布状況は、平成19年度と比較して、学力低位層へと拡散化の傾向が表れている）

#### 平成20年度 正答数分布



#### 平成20年度 正答率3層に見る全国との分布差

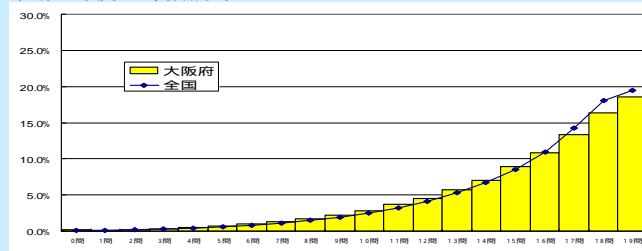


●A区分問題は総問題数が19問であり、全国、大阪府ともに17問（100点満点換算で約89点）を頂点とするなだらかな右寄りの山型を描いている。

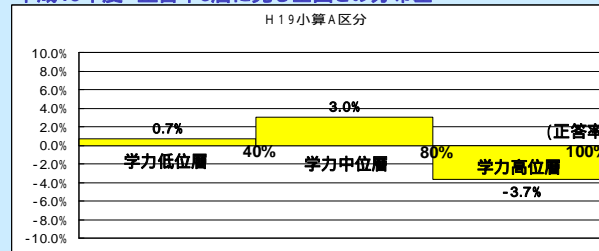
●前年度と比較すると、前年度は全国、大阪府ともに全19問中19問（100点満点換算で100点）を頂点とする片側傾斜の山型を描いており、今年度の調査においては、全国、大阪府ともに低位層の方向に分布が拡散したといえる。

●更に前年度は、17問（100点満点換算で約89点）以上の分布の割合が、全国で51.8%、大阪府で48.2%と約半数を占めていたのに対し、今年度調査では、それぞれ26.4%、25.3%である。

#### 平成19年度 正答数分布



#### 平成19年度 正答率3層に見る全国との分布差



●大阪府の正答数分布は、13問（100点満点換算で約68点）以上で全国の状況を下回り、4問（100点満点換算で21点）～12問（100点満点換算で約63点）の間で全国の状況を上回っている。3問以下では全国との差はみられない。これらことから、全国の状況に比べると学力高位層が少なく、中位層が多いといえる。ただし、19問全問正答の割合は、全国を上回る。

●全国と大阪府の分布の差について学力を三層に分けてみてみると、正答数16問（100点満点換算で約80点）以上の学力高位層で全国を下回る割合は2.1ポイント縮まり、8問～15問の学力中位層（100点満点換算で約40点～80点）、7問以下の学力低位層（100点満点換算で約40点以下）においては、それぞれ2.2ポイント、0.3ポイント、全国を上回る割合が縮まった。

### A区分問題（「知識」に関する問題）にみえる課題等

#### 【数と計算】

整数、小数の四則計算は、相当数の児童ができています。小数の計算における乗数と積の大きさ、除数と商の大きさの関係についてその理解に課題がある。

#### 【量と測定】

面積についての感覚を身に付けることに課題がある。

#### 【図形】

基本的な平面図形の定義や性質をもとに、図形をとらえることに課題がある。

#### 【数量関係】

円グラフをよむことは、相当数の児童ができています。加法と乗法の混合した整数の計算において、計算の順序についての決まりの理解に、課題がある。

# 小学校算数

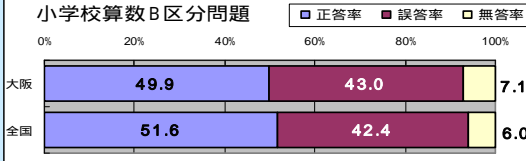
## B区分問題（「活用」に関する問題）

平成20年度  
全国学力・学習状況調査  
学力調査結果報告

平均正答率が49.9%であり、今回出題された学習内容に係る知識・技能を活用する力に課題がある

### 正答率比較 全体として見れば、19年度と比べやや難しい内容となっている

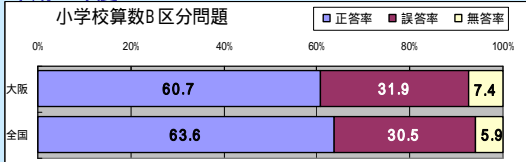
平成20年度（これまでの調査で課題の見られた内容・より正確な理解が必要な問題が多い）



●正答率においては、全国が51.6%であるのに対し、大阪府の平均は49.9%で、1.7ポイント下回っている。

●誤答率で0.6ポイント、無答率では1.1ポイント、全国を上回っている。

### 平成19年度



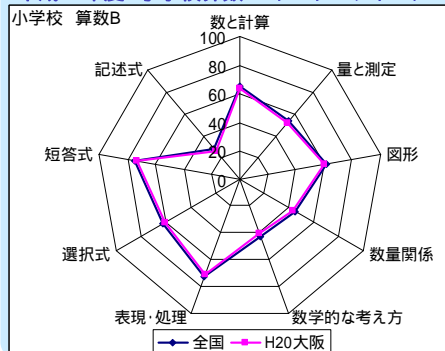
●今年度の調査においては、前年度と比較して、正答率、無答率で、全国との差は縮まった。

●前年度と比較すると、全国、大阪府ともに正答率で約11～12ポイント下回り、誤答率では約11～12ポイント上回る結果となった。無答率においては、大きな差はみられなかった。

### 領域・観点・問題形式別

領域・観点・問題形式別の状況は全国と同傾向

平成20年度 小学校算数B レーダーチャート（「数学的な考え方」・「記述式問題」に課題）



●全体の傾向は、全国の状況と同じであり、全国を示すラインとほぼ重なるようにラインを描いている。いずれの項目も、全国の状況との間に差はみられない。

●今年度の調査においては、他の項目に比べ「表現・処理」で良好な状況がみられる。

●一方で、「量と測定」「数量関係」「数学的な考え方」に課題がみられる。

●特に「記述式の問題」は正答率が30%程度と他の項目に比べ低く、課題である。

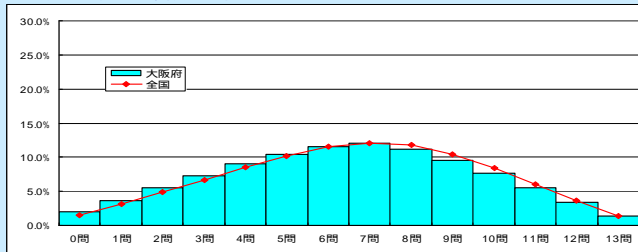
●前年度と比較すると、今年度の調査は各項目間の正答率の差が大きいですが、全国との差は縮まったといえる。

### 正答数分布

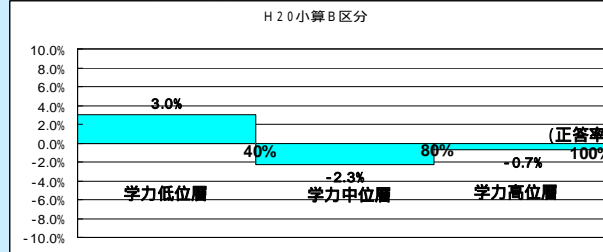
正答数分布の状況は全国と同傾向で、全国との分布状況の差は平成19年度に比べ、学力低・高位層で縮まっている

（問題の難易度が高まったことを反映し、正答数の分布状況は、平成19年度に比較すると、学力高位層の割合が低くなり、学力低位層の割合が高くなっている）

#### 平成20年度 正答数分布



#### 平成20年度 正答率3層に見る全国との分布差

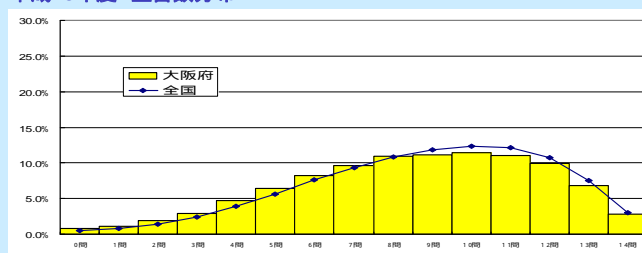


●B区分問題は総問題数が13問であり、全国、大阪府ともに7問（100点満点換算で約54点）を頂点とするなだらかな左右対称な山型を描いている。

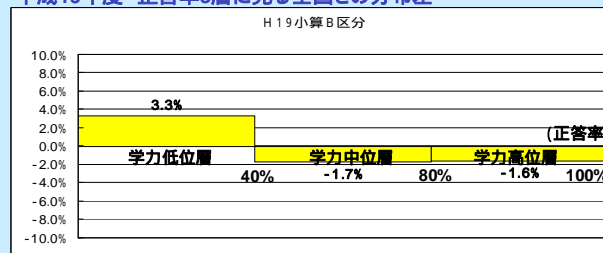
●前年度と比較すると、前年度は全国、大阪府ともに全14問中10問（100点満点換算で約71点）を頂点とする右寄りのなだらかな山型を描いており、今年度の調査においては、全国、大阪府ともに低位層の方向に分布が拡散したといえる。

●更に前年度は、7問（100点満点換算で50点）以上の分布の割合が、全国で77.6%、大阪府で73.8%と7割以上を占めていたのに対し、今年度調査では、それぞれ53.7%、50.7%である。

#### 平成19年度 正答数分布



#### 平成19年度 正答率3層に見る全国との分布差



●大阪府の正答数分布は、7問（100点満点換算で約54点）以上で全国の状況を下回り、6問（100点満点換算で約46点）以下で全国の状況を上回っている。全国の状況に比べると学力高位層が少なく、下位層が多いといえる。

●全国と大阪府の分布の差について学力を三層に分けてみると、正答数10問（100点満点換算で約80点）以上の学力高位層で全国を下回る割合は0.9ポイント縮まり、5問以下の学力低位層（100点満点換算で約40点以下）においては、全国を上回る割合が0.3ポイント縮まった。しかし、6問～9問の学力中位層（100点満点換算で約40点～80点）では、全国を上回る割合が0.6ポイント拡大した。

### B区分問題（「活用」に関する問題）にみえる課題等

#### 【数と計算】

情報を整理・選択して筋道を立てて考え、示された判断が正しい理由を式と言葉を用いて記述することに課題がある。

#### 【量と測定】

円の面積の求め方を基に、半円の面積の求め方を表す式を読み取ることに課題がある。

#### 【図形】

図形を変えて考える発展的な場面で、面積の関係をとらえ、判断の理由を言葉や式を用いて記述することに課題がある。

#### 【数量関係】

他者の考え方が正しいかどうかについて割合の考えを用いて判断し、その理由を言葉や式を用いて記述することに課題がある。

グラフの特徴を基に表されている内容をよみとり、違いを言葉や数を用いて記述することに課題がある。

# 中学校国語

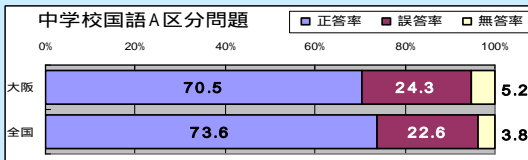
## A区分問題（「知識」に関する問題）

平成20年度  
全国学力・学習状況調査  
学力調査結果報告

平均正答率が70.5%であり、今回出題された学習内容の知識・技能について更に身に付けさせる必要がある

### 正答率比較 全体として見れば、19年度と比べやや難しい内容となっている

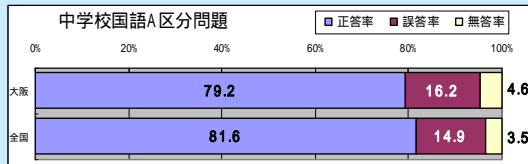
平成20年度（これまでの調査で課題の見られた内容・より正確な理解が必要な問題が多い）



●正答率においては、全国が73.6%であるのに対し、大阪府の平均は70.5%で、3.1ポイント下回っている。

●誤答率で1.7ポイント、無答率では1.4ポイント、全国を上回っている。

平成19年度



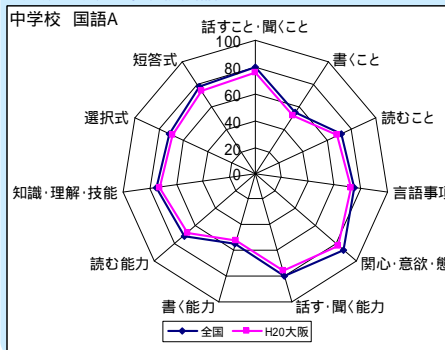
●今年度の調査においては、前年度と比較して、正答率、誤答率、無答率で、全国との差に大きな変化はみられない。

●前年度と比較すると、全国、大阪府ともに正答率で約8～9ポイント下回り、誤答率では約8ポイント上回っている。無答率に大きな差はみられない。

### 領域・観点・問題形式別

領域・観点・問題形式別の状況は全国と同傾向  
（「書くこと」に課題）

平成20年度 中学校国語A レーダーチャート



●全体の傾向としては、全国の状況と同じであり、全国を示すラインのわずかに内側にラインを描いている。

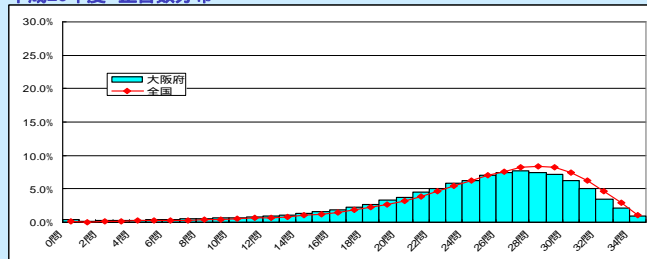
●今年度の調査においては、「話すこと・聞くこと」「話す・聞く能力」「関心・意欲・態度」については比較的良好であり、前年度と同じ結果が表れた。

●一方で、「書くこと」「書く能力」では課題が見られ、このことについても前年度と同じである。

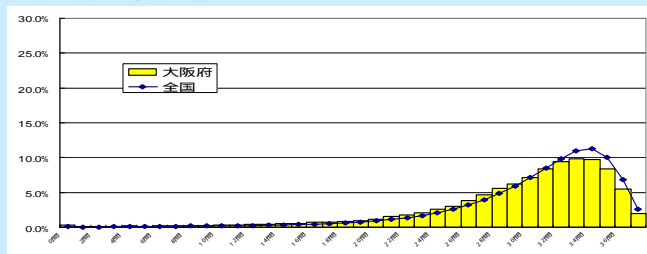
### 正答数分布

正答数分布の状況は全国と同傾向であり、全国との分布状況の差は平成19年度に比べ、学力高・中位層において縮まるが、低位層では広がる  
（問題の難易度が高まったことを反映し、正答数の分布状況は、平成19年度と比較して、学力低位層へと拡散化の傾向が表れている）

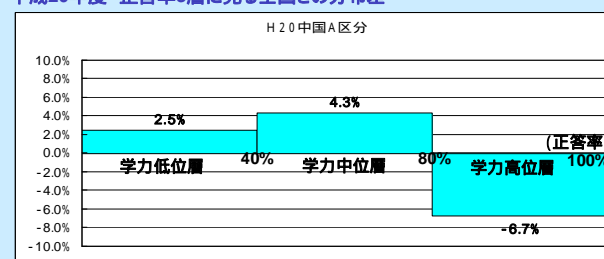
平成20年度 正答数分布



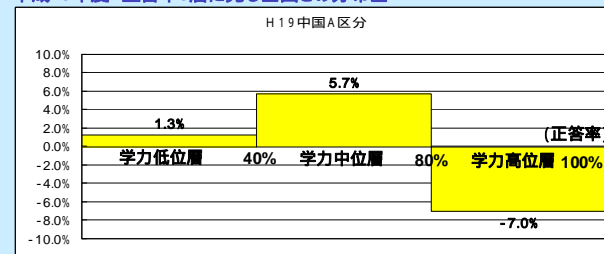
平成19年度 正答数分布



平成20年度 正答率3層に見る全国との分布差



平成19年度 正答率3層に見る全国との分布差



●A区分問題は総問題数が34問であるが、全国においては、28問(100点満点換算で約82点)を頂点とするなだらかな山型を描いているが、大阪府では27問(100点満点換算で約79点)を頂点とするなだらかな山型を描いている。

●前年度と比較すると、前年度は全国で37問中34問(100点満点換算で約92点)、大阪府では33問(100点満点換算で89点)をそれぞれ頂点とするなだらかな山型を描いており、今年度の調査においては、全国、大阪府、ともに低位層の方向に分布が拡散しているといえる。

●更に前年度は、30問(100点満点換算で約80点)以上正答した生徒の割合が、全国で67.3%、大阪府で60.3%あったのに対し、今年度では28問(100点満点換算で約80点)以上正答した生徒の割合は、それぞれ39.1%、32.4%である。

●大阪府の正答数分布は、26問(100点満点換算で76点)以上で全国の状況を下回り、25問(100点満点換算で74点)以下で全国の状況を上回っていることから、全国の状況に比べると学力高位層が少なく、中・低位層が多いといえる。

●全国と大阪府の分布の差について学力を三層に分けてみると、正答数28問(100点満点換算で約80点)以上の学力高位層で全国を下回る割合、正答数14問～27問(100点満点換算で約40点～80点)の学力中位層で全国を上回る割合は、それぞれ0.3ポイント、1.4ポイント縮まった。一方で、13問以下(100点満点換算で40点未満)の学力低位層においては、全国を上回る割合が1.2ポイント拡大している。

### A区分問題（「知識」に関する問題）にみえる課題等

#### 【話すこと・聞くこと】

話し合いの方向をとらえて適切な発言をすること、インタビューの展開を考えて適切な質問をすることは相当数の生徒ができています。  
話の構成に注意しながら的確に聞き取ることに課題がある。  
効果的なインタビューをするための準備をし、調べ方などを適切に生かすことに課題がある。

#### 【読むこと】

古文の中の文のまとまりをつかむ、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読むことに課題がある。

論理の展開の仕方に即して、内容を読み取ることに課題がある。

#### 【言語事項】

文脈に即して漢字を正しく読むこと、語句の意味を理解して文脈の中で適切に使うことは、相当数の生徒ができています。

文脈に即して漢字を正しく書くことに課題がある。  
文字の配列・配置に注意して書くことに課題がある。



# 中学校国語

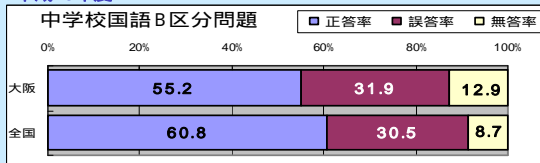
## B区分問題（「活用」に関する問題）

平成20年度  
全国学力・学習状況調査  
学力調査結果報告

平均正答率が55.2%であり、今回出題された学習内容に係る知識・技能を活用する力に課題がある

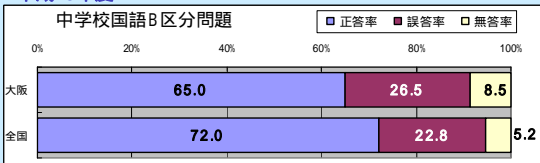
### 正答率比較 全体として見れば、19年度と比べやや難しい内容となっている

平成20年度（これまでの調査で課題の見られた内容や、より正確な理解が必要な問題が多い）



- 正答率においては、全国が60.8%であるのに対し、大阪府の平均は55.2%で、5.6ポイント下回っている。
- 誤答率で1.4ポイント、無答率では4.2ポイント、全国を上回っている。

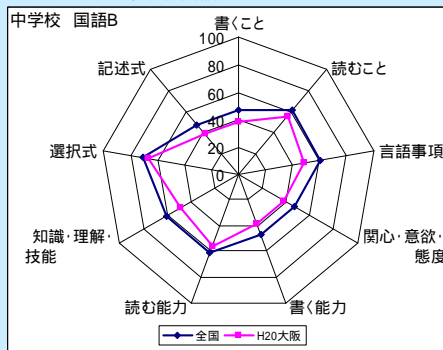
### 平成19年度



- 今年度の調査においては、前年度と比較して、正答率、誤答率で全国との差は縮まった。
- 前年度と比較すると、全国、大阪府ともに正答率で約10～11ポイント下回り、誤答率では約5～8ポイント、無答率で約3～4ポイント上回っている。

### 領域・観点・問題形式別

平成20年度 中学校国語B レーダーチャート



領域・観点・問題形式別の状況は全国と同傾向（「読む能力」「選択式問題」で比較的良好）

- 全体の傾向としては、全国の状況と同じであるが、全国を示すラインの内側に描かれる大阪府の状況を示すラインとの間には項目によっては10ポイント程度の隔りがある。

- 今年度の調査においては、「書くこと」「書く能力」「関心・意欲・態度」「記述式問題」で正答率が40%近くになっており、課題である。

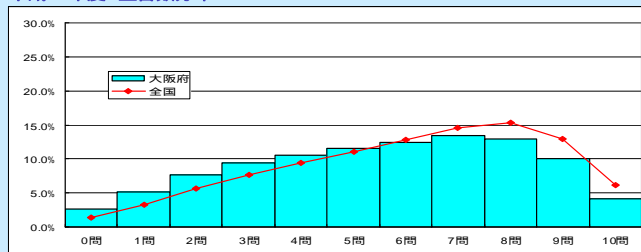
- 課題として明らかになった項目は、前年度も同様に課題であった。

### 正答数分布

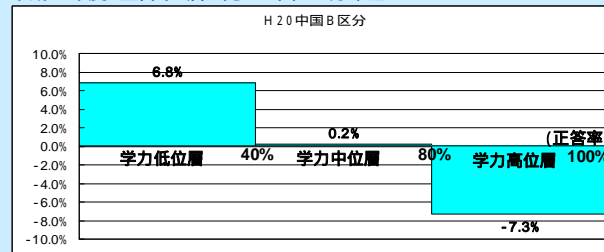
正答数分布の状況は全国と同傾向であるが、全国との分布状況の差は平成19年度に比べ、学力高位層で縮まり、低位層で拡大している

（問題の難易度が高まったことを反映し、正答数の分布状況は、学力低位層で平成19年度の状況を上回っている）

#### 平成20年度 正答数分布



#### 平成20年度 正答率3層に見る全国との分布差

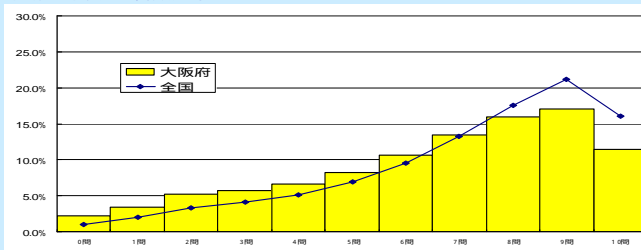


- A区分問題は総問題数が10問であるが、全国においては、8問（100点満点換算で80点）を頂点とする右寄りの山型を描いているが、大阪府では7問（100点満点換算で70点）を頂点とするなだらかな山型を描いている。

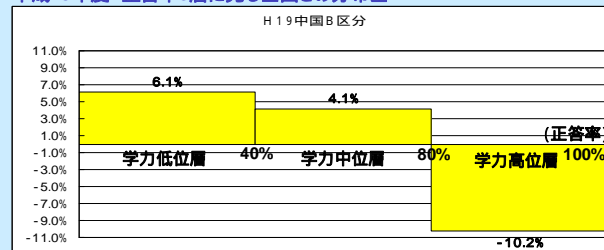
- 前年度と比較すると、前年度は全国、大阪府ともに10問中9問（100点満点換算で90点）を頂点とするなだらかな山型を描いており、今年度の調査においては、全国、大阪府、ともに低位層の方向に分布が拡散しているといえる。

- 更に前年度は、8問（100点満点換算で80点）以上正答した生徒の割合が、全国で54.7%、大阪府で44.5%あったのに対し、今年度では、それぞれ34.4%、27.1%である。

#### 平成19年度 正答数分布



#### 平成19年度 正答率3層に見る全国との分布差



- 大阪府の正答数分布は、6問（100点満点換算で60点）以上で全国の状況を下回り、5問（100点満点換算で50点）以下で全国の状況を上回っていることから、全国の状況に比べると学力高位層が少なく、中・低位層が多いといえる。

- 全国と大阪府の分布の差について学力を三層に分けてみると、正答数8問（100点満点換算で約80点）以上の学力高位層で全国を下回る割合、正答数4問～8問（100点満点換算で約40点～80点）の学力中位層で全国を下回る割合、上回る割合は、それぞれ2.9ポイント、3.9ポイント縮まった。一方で、3問以下（100点満点換算で40点未満）の学力低位層においては、全国を上回る割合が0.7ポイント拡大している。

### B区分問題（「活用」に関する問題）にみえる課題等

#### 【読むこと】

- 資料に書かれている情報の中から必要な情報を選ぶことに課題がある。
- 表現の仕方や文章の特徴に注意しながら読むことに課題がある。
- 文章に表れているものの見方や考え方について四字熟語を手がかりにして理解することに課題がある。
- 目的を持って様々な文章を読み、必要な情報を集めて自分の表現に役立てることに課題がある。

#### 【書くこと】

- 伝えたい事項が明確に伝わるように書くことに課題がある。
- 読み取った内容を条件に合った表現に直して書くことに課題がある。
- 具体的な例を示しながら効果的に説明することに課題がある。
- 自分の立場を明確にして意見を書くことについて課題がある。

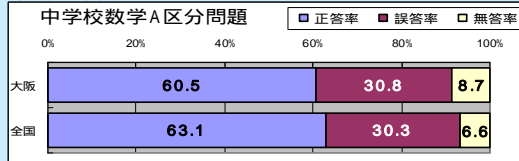
# 中学校数学 A区分問題（「知識」に関する問題）

平成20年度  
全国学力・学習状況調査  
学力調査結果報告

平均正答率が60.5%であり、今回出題された学習内容の知識・技能の定着に一部課題が見られる

## 正答率比較 全体として見れば、19年度と比べやや難しい内容となっている

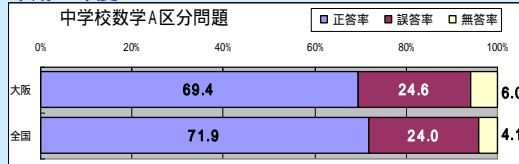
平成20年度（これまでの調査で課題の見られた内容・より正確な理解が必要な問題が多い）



●正答率においては、全国が63.1%であるのに対し、大阪府の平均は60.5%で、2.6ポイント下回っている。

●誤答率で0.5ポイント、無答率では2.1ポイント、全国を上回っている。

## 平成19年度



●今年度の調査においては、前年度と比較して、正答率、無答率で、全国との差はほとんどみられない。

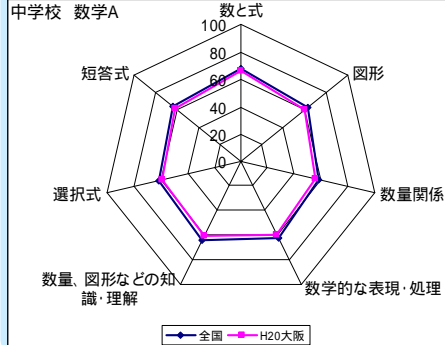
●前年度と比較すると、全国、大阪府ともに正答率で約9ポイント下回り、無答率では約2ポイント上回る結果となった。

## 領域・観点・問題形式別

領域・観点・問題形式別の状況は全国と同傾向

（「数と式」で比較的良好）

## 平成20年度 中学校数学A レーダーチャート



●全体の傾向は、全国の状況と同じであり、全国を示すラインとほぼ重なるようにラインを描いている。いずれの項目も、全国の状況との間に差はみられない。

●今年度調査においては、前年度同様、各項目間の差はほとんどみられない。

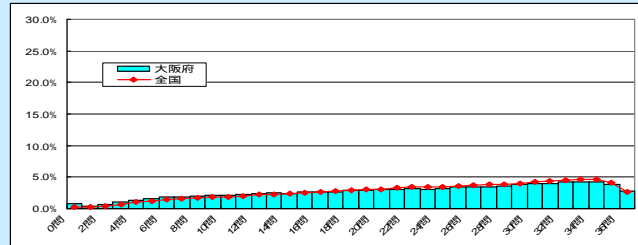
●他の項目に比較すると、「数と式」が比較的良好な状況にある。

## 正答数分布

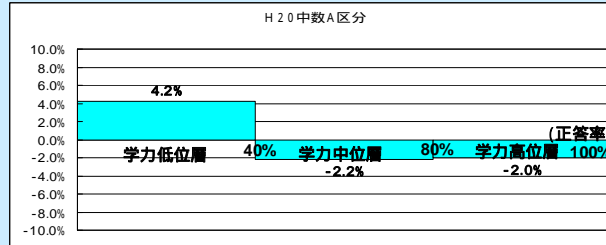
正答数分布の状況は全国と同傾向で、全国との分布状況の差は平成19年度に比べ、学力中・高位層で縮まっている

（問題の難易度が高まったことを反映し、正答数の分布状況は、平成19年度と比較して、学力低位層へと拡散化の傾向が表れている）

## 平成20年度 正答数分布



## 平成20年度 正答率3層に見る全国との分布差

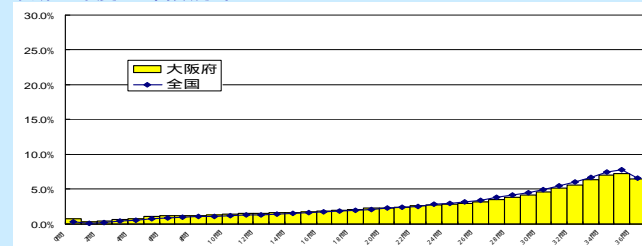


●A区分問題は総問題数が36問であり、全国、大阪府ともに33問（100点満点換算で約92点）を頂点とするわずかに右上がりのほとんど平坦な山型を描いている。

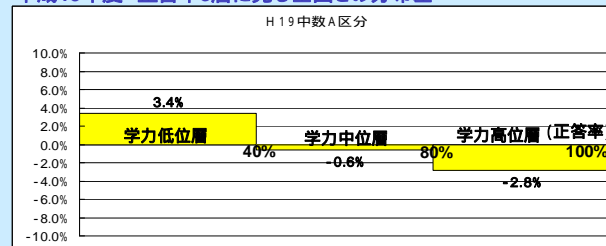
●前年度と比較すると、前年度は全国、大阪府ともに全33問中32問（100点満点換算で97点）を頂点とする片側傾斜の山型を描いており、今年度の調査においては、全国、大阪府ともに低位層の方向に分布が拡散したといえる。

●更に前年度は、29問（100点満点換算で約80点）以上の分布の割合が、全国で49.6%、大阪府で46.9%と約半数を占めていたのに対し、今年度調査では、それぞれ33.3%、31.3%である。

## 平成19年度 正答数分布



## 平成19年度 正答率3層に見る全国との分布差



●大阪府の正答数分布は、19問（100点満点換算で約53点）以上で全国の状況を下回り、18問（100点満点換算で50点）以下では全国の状況を上回っている。このことから、全国の状況に比べると学力高位層が少なく、低位層が多いといえる。ただし、36問全問正答の割合は、全国を上回る。

●全国と大阪府の分布の差について学力を三層に分けてみると、正答数29問（100点満点換算で約80点）以上の学力高位層で全国を下回る割合は0.8ポイント縮まり、15問～28問の学力中位層（100点満点換算で約40点～80点）で下回り、14問以下の学力低位層（100点満点換算で約40点以下）で全国を上回る割合は、それぞれ1.6ポイント、0.8ポイント拡大した。

## A区分問題（「知識」に関する問題）にみえる課題等

### 【数と式】

整式の減法の計算は、相当数の生徒ができていない。  
与えられた文字式を具体的な事象と関連付け、その意味をよみとることに課題がある。

作図方法を、図形の対称性に着目して見直すことに課題がある。  
多角形の内角の和を求める公式の意味を理解することに課題がある。

### 【図形】

図形の一部と対称の中心が与えられたときに、点対称な図形を完成することに課題がある。

### 【数量関係】

反比例や一次関数の関係を式に表すことに課題がある。  
具体的な事象について表したグラフから、2つの数量の対応をよみとることに課題がある。



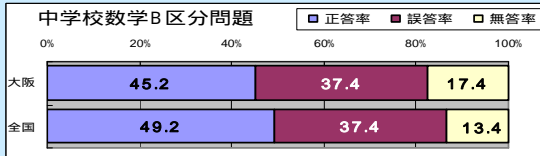
# 中学校数学 B 区分問題（「活用」に関する問題）

平成20年度  
全国学力・学習状況調査  
学力調査結果報告

平均正答率が45.2%であり、今回出題された学習内容に係る知識・技能を活用する力に課題がある

## 正答率比較 全体として見れば、19年度と比べやや難しい内容となっている

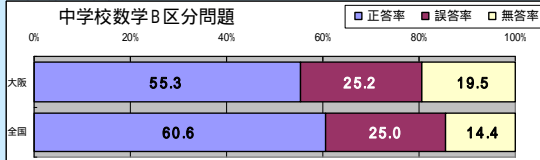
平成20年度（これまでの調査で課題の見られた内容・より正確な理解が必要な問題が多い）



●正答率においては、全国が49.2%であるのに対し、大阪府の平均は45.2%で、4.0ポイント下回っている。

●無答率では4.0ポイント、全国を上回っており、誤答率は同じである。

## 平成19年度



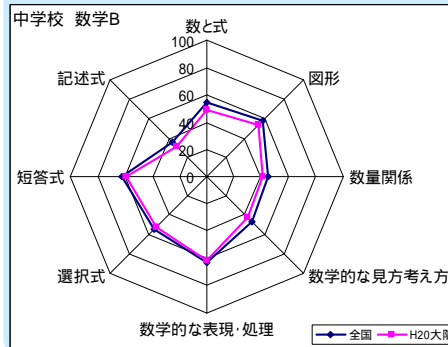
●今年度の調査においては、前年度と比較して、正答率、無答率で、全国との差は縮まった。

●前年度と比較すると、全国、大阪府ともに正答率で約10～11ポイント下回り、誤答率では約12ポイント上回る結果となった。一方で、無答率においては、約1～2ポイント下回っている。

## 領域・観点・問題形式別 領域・観点・問題形式別の状況は全国と同傾向

（「数量関係」「数学的な見方考え方」「記述式問題」に課題）

### 平成20年度 中学校数学B レーダーチャート



●全体の傾向は、全国の状況と同じであり、全国を示すラインのわずかに内側に描いている。

●今年度の調査においては、他の項目に比べ「数学的な表現・処理」「短答式問題」で比較的良好な状況がみられる。

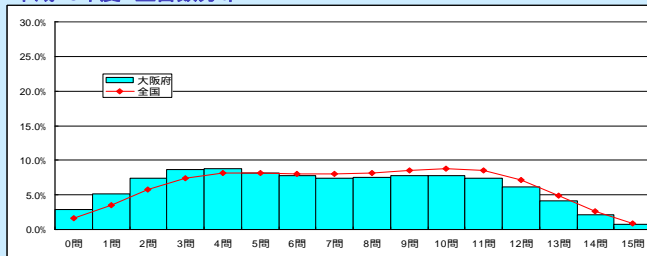
●一方で、「数量関係」「数学的な見方考え方」「記述式問題」では正答率が40%であり、課題である。

●特に「記述式問題」では40%を下回っており、前年度同様大きな課題である。

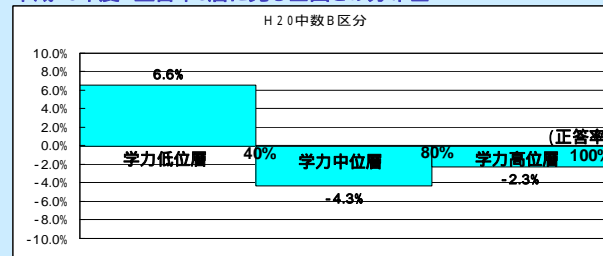
## 正答数分布 正答数分布の状況は全国と同傾向であるが、全国との分布状況の差は平成19年度に比べ、学力高・低位層で縮まっている

（問題の難易度が高まったことを反映し、正答数の分布状況は、平成19年度と比較して、学力低位層と高位層に二極化する傾向が表れ始めている）

### 平成20年度 正答数分布



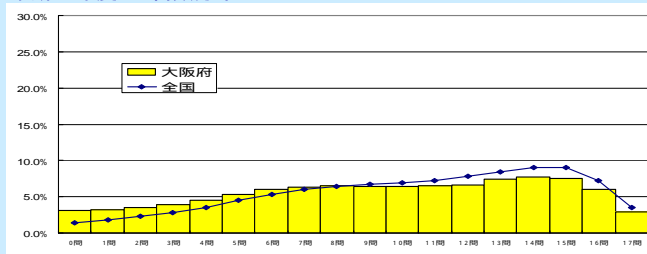
### 平成20年度 正答率3層に見る全国との分布差



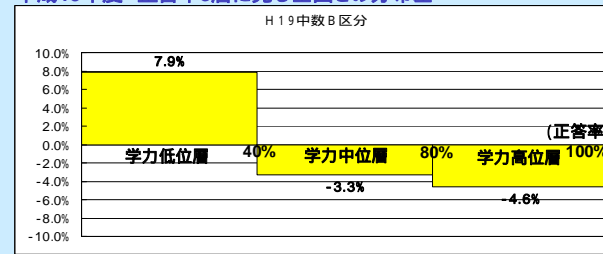
●B区分問題は総問題数が15問であり、全国、大阪府ともに10問（100点満点換算で約67点）辺りと、4問（100点満点換算で約27点）辺りの2箇所を頂点とするゆるやかな双凸状を描いている。大阪府においては、低位層の4問の方が分布の割合が高い。

●前年度と比較すると、前年度は全国、大阪府ともに全17問中14問（100点満点換算で約82点）を頂点とする平板であるがわずかに右寄りのなだらかな山型を描いており、今年度の調査においては、全国、大阪府ともに低位層の方向に一層分布が拡散したといえる。

### 平成19年度 正答数分布



### 平成19年度 正答率3層に見る全国との分布差



●大阪府の正答数分布は、6問（100点満点換算で40点）以上で全国の状況を上回り、5問（100点満点換算で約33点）以下で全国の状況を上回っている。全国の状況に比べると学力高・中位層が少なく、低位層が多いといえる。

●全国と大阪府の分布の差について学力を三層に分けてみると、正答数12問（100点満点換算で80点）以上の学力高位層で全国を下回る割合は2.3ポイント縮まり、5問以下の学力低位層（100点満点換算で約40点以下）においては、1.3ポイント全国を上回る割合が縮まった。しかし、6問～11問の学力中位層（100点満点換算で約40点～80点）では、全国を下回る割合が1.0ポイント拡大しており、全国に比べて、双凸の谷間の落ち込みが大きいことがわかる。

## B 区分問題（「活用」に関する問題）にみえる課題等

### 【数と式】

予想されたことがらが成り立つ理由を、示された方針にもとづいて文字式で説明することに課題がある。

発展的に考え、予想したことがらを説明することに課題がある。

### 【図形】

証明の方針を立てる際に根拠となることがらを筋道立てて考えることに課題がある。

提示された方針にもとづいて三角形の合同を利用して証明することに課題がある。

### 【数量関係】

事象を理想化・単純化してとらえ、その特徴を数学的に解釈し、一次関数であることを判断することに課題がある。

事象を数学的に解釈して判断し、その理由や方法を数学的な表現を用いて説明することに課題がある。

児童・生徒質問紙調査 学校質問紙調査

全国学力・学習状況調査における、学習状況を把握するためのアンケート調査

昨年度の調査結果と比較したとき、全体的には大きな変化は見られない。

以下、全国の状況との比較における特徴的な項目についての概要をのべる。

【生活の様子】

「就寝や起床の時間」、「朝食の摂取」、「学校の準備」等で望ましい状況の回答をした子どもの割合が低い。

【家庭学習の様子】

長時間学習に取り組む子どもの割合が高い反面、家庭で全く学習しない子どもの割合も高い。  
読書が好きと答えている子どもの割合が低く、まったく読書しない子どもの割合も高い。

【学校での学習の様子】

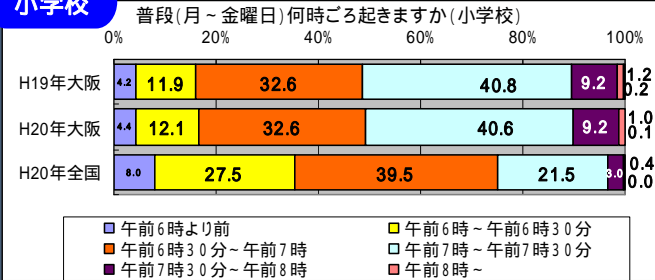
「勉強に対する熱意」「授業規律」などに課題があると答えている割合が高い。  
授業において「資料を読んで、自分の考えを話したり、書いたりする」と答えた回答の割合が低い。  
学習内容を普段の生活や自分の将来につなげていると答えた子どもの割合が低い。  
昨年度より、放課後等の補充的な学習を実施している学校の割合が高く、今年度も増加傾向にある。

【学校の状況】

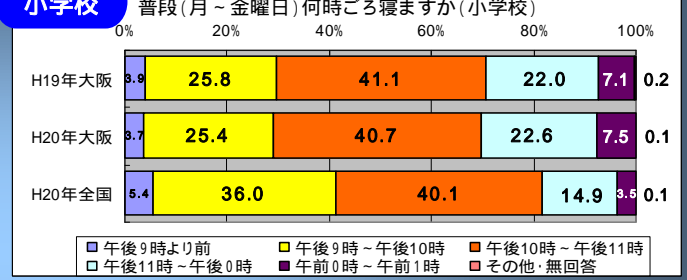
小中学校とも、就学援助を受けている児童生徒の在籍率の高い学校が多い。  
中学校での授業参観の回数が全国に比べて少ない。  
授業研究を伴う校内研修の実施回数が全国に比べて少ない。  
PTAや地域の人々の学校活動への参画状況は、やや増加傾向にあるが、全国に比べて少ない。

起床時刻が遅く、就寝時刻が遅い

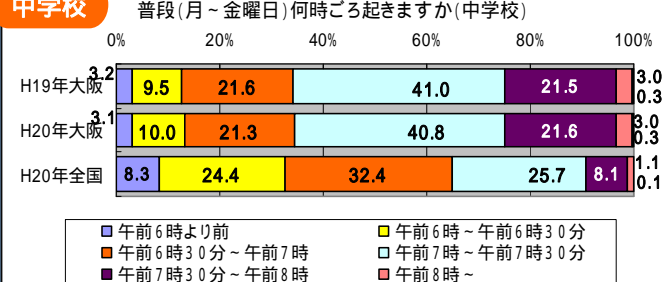
小学校



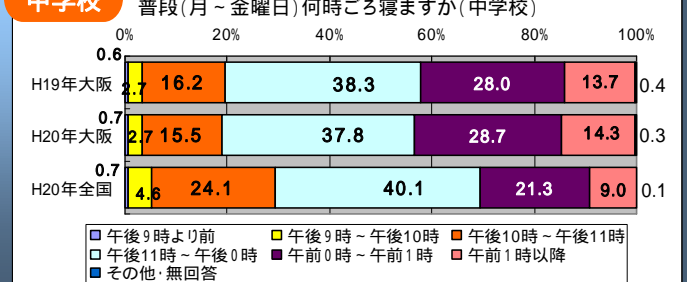
小学校



中学校

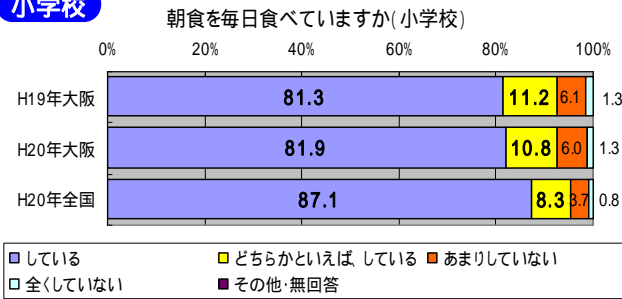


中学校



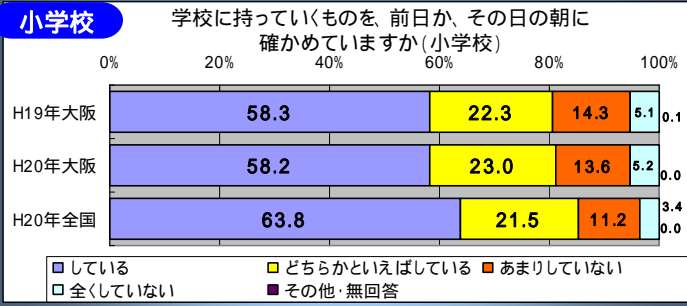
毎朝、朝食を食べている子どもの割合が低い

小学校

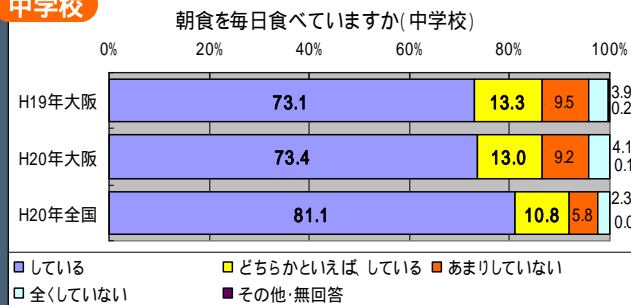


余裕をもって学校の準備を行っている子どもの割合が低い

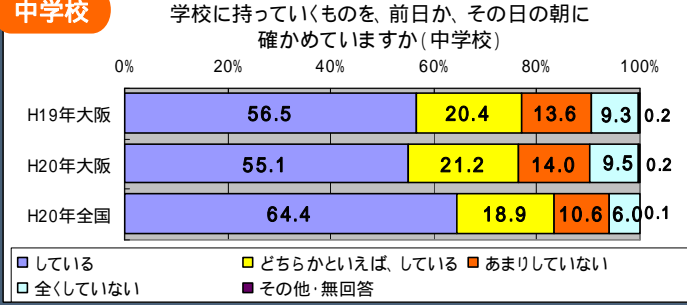
小学校



中学校

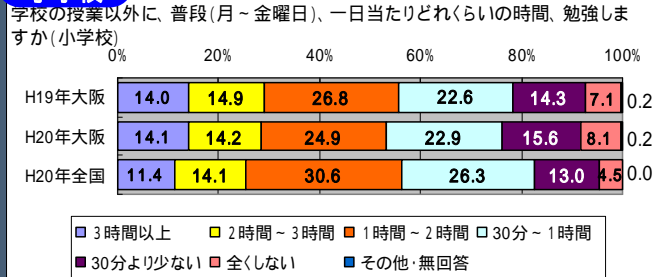


中学校

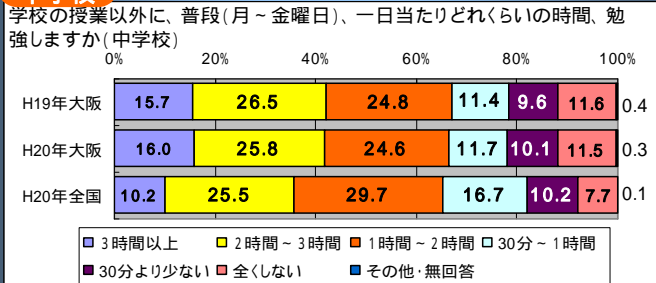


普段の家庭学習の時間は、長時間タイプと短時間タイプに分かれる傾向にある。

小学校

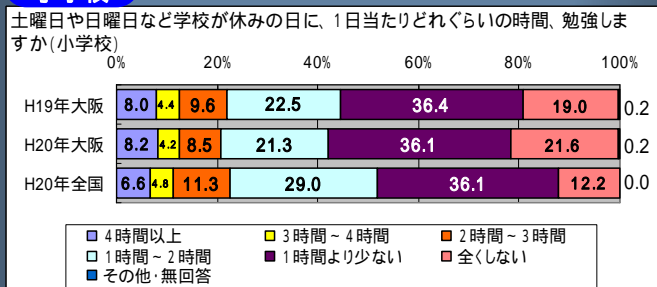


中学校

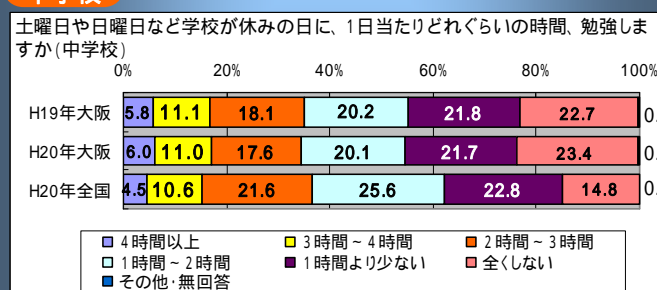


土曜日・日曜日に家庭学習を全くしない子どもたちの割合が高い

小学校

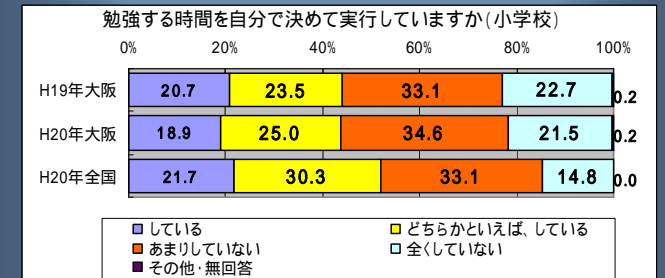


中学校

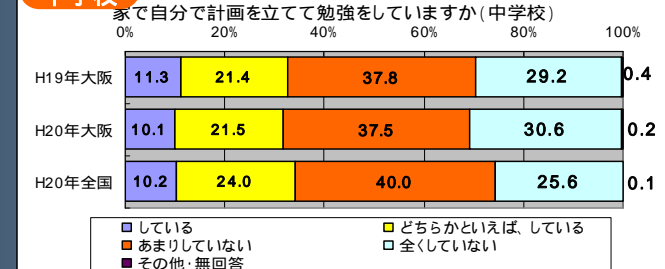


学習時間を自分で決めて実行している子どもたちの割合がやや少ない

小学校

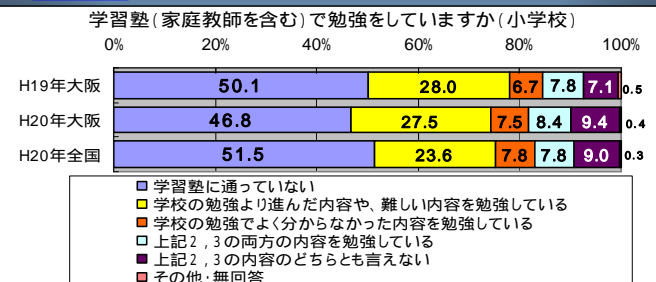


中学校

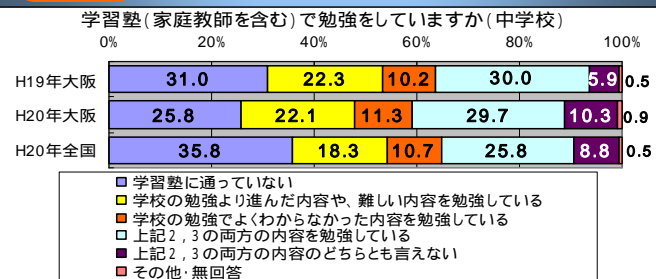


学習塾等で勉強する子どもたちの割合が多い

小学校

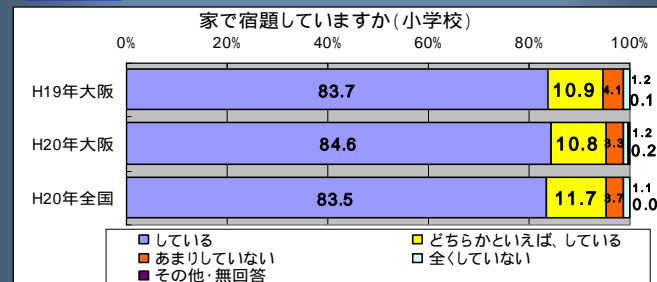


中学校

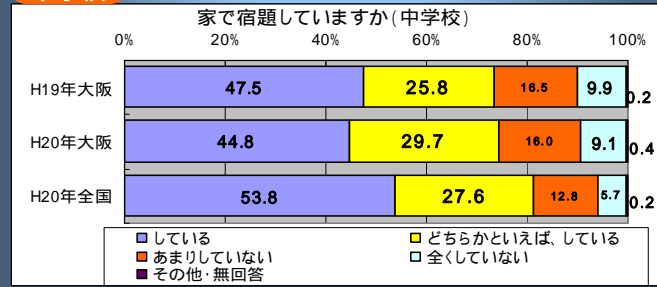


中学生で宿題をしていない子ども割合が高い

小学校

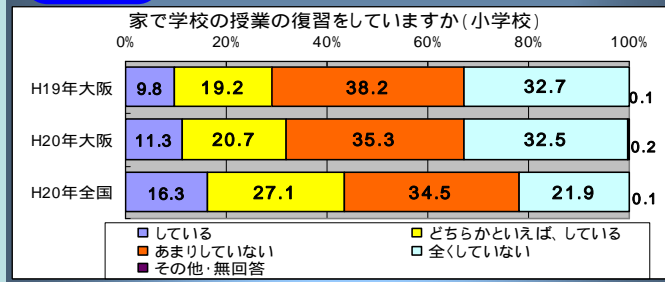


中学校

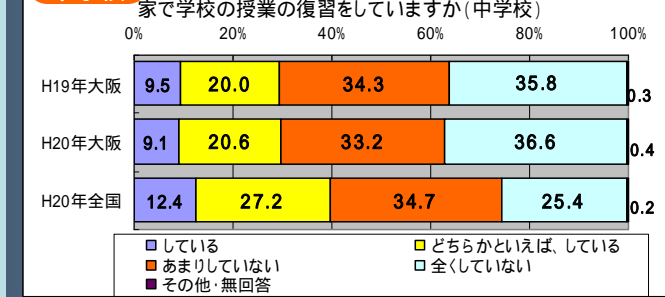


授業の復習をしていない子どもの割合が高い

小学校



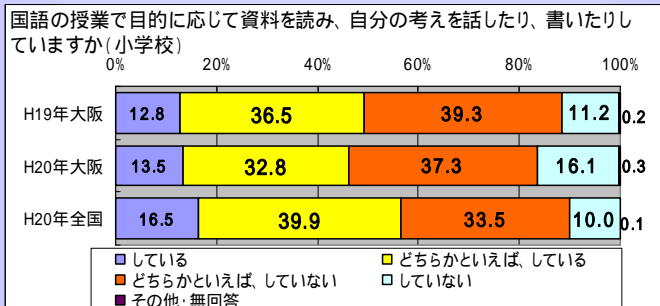
中学校



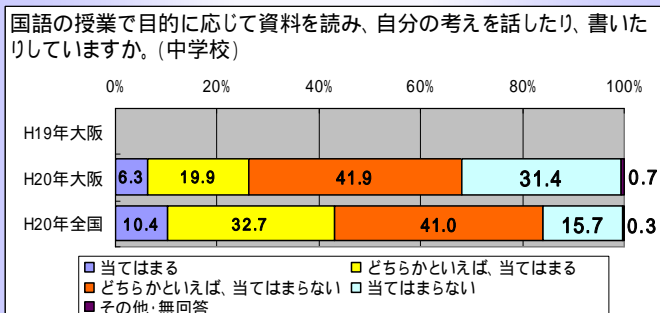


国語の授業で、自分の考えを話したり、書いたり、資料や文章を比較検討する授業が少ない

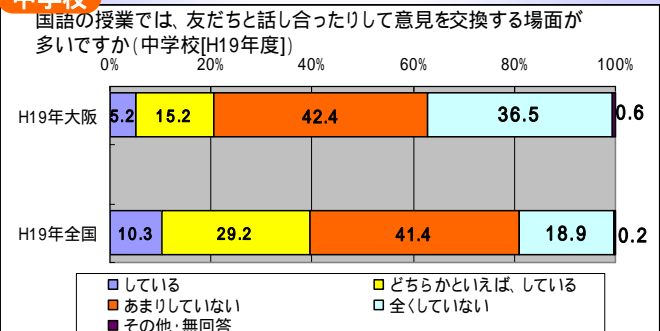
小学校



中学校



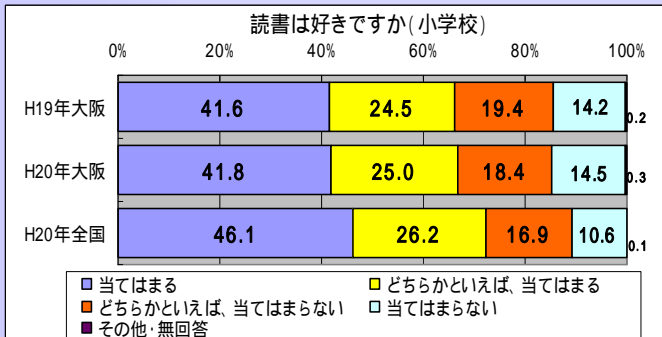
中学校



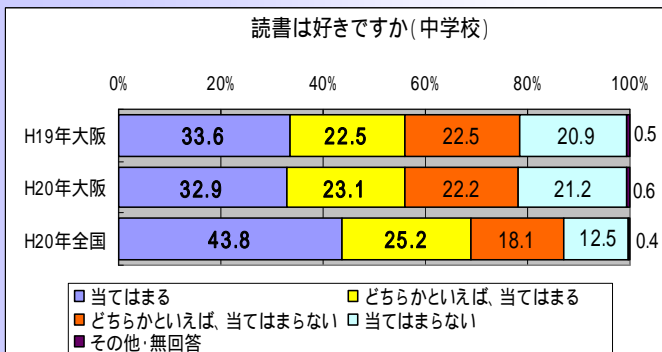
「授業内容」については、昨年度と今年度で質問が変更されているため、直接の経年比較は行っていない。

読書が好きな子どもの割合が少なく、読書習慣のない子どもの割合が多い

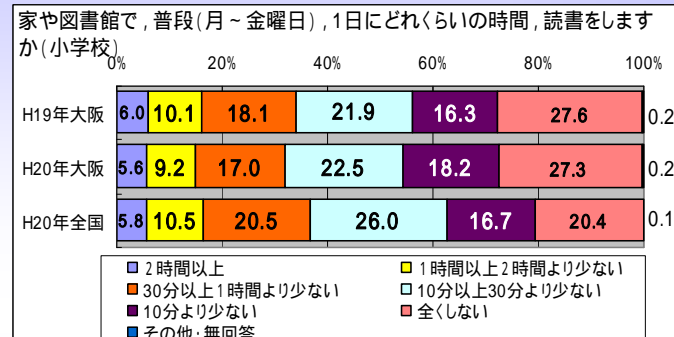
小学校



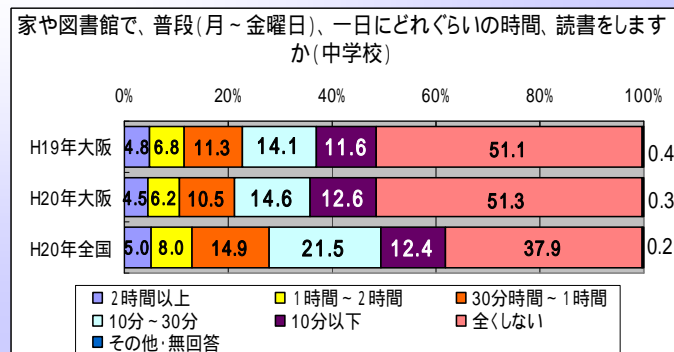
中学校



小学校

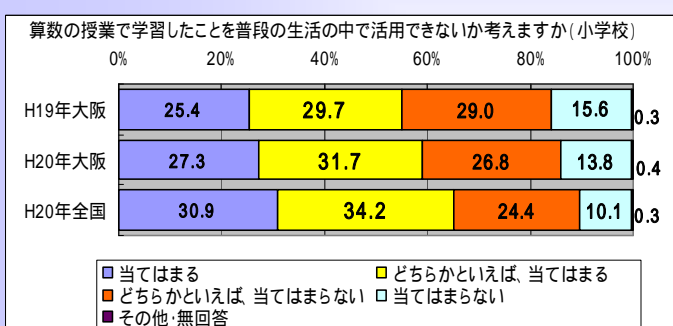


中学校

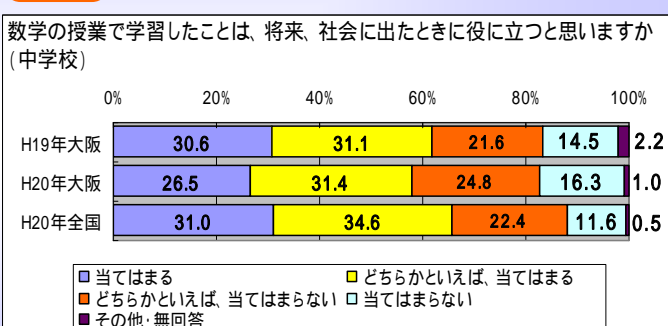


学習を普段の生活や自分将来にむすびつけて考える子どもの割合が少ない

小学校



中学校

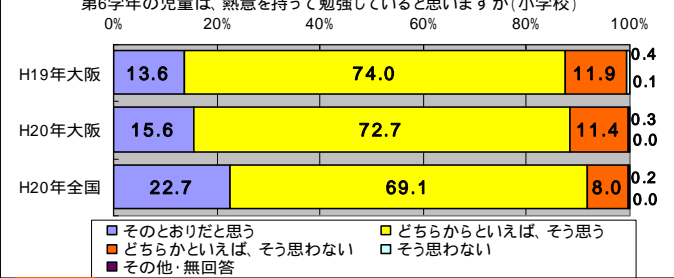


小中学校とも、児童生徒が「熱意を持って勉強している」と捉えている学校の割合は全国を下回る

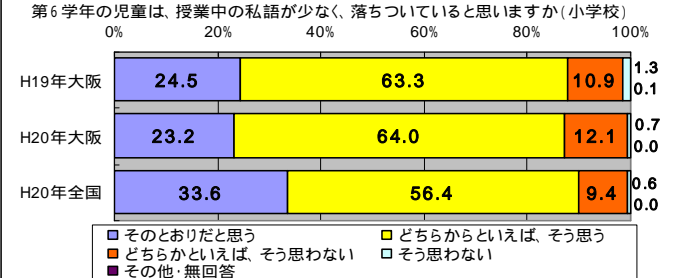
小中学校とも、児童生徒が「授業中の私語が少なく落ちついている」と捉えている学校の割合は低い

小中学校とも、児童生徒が「礼儀正しい」と捉えている学校の割合は、全国を下回る

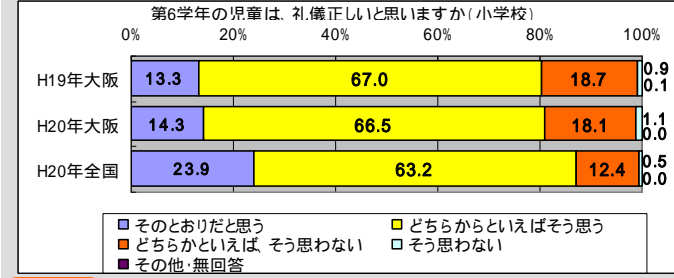
小学校



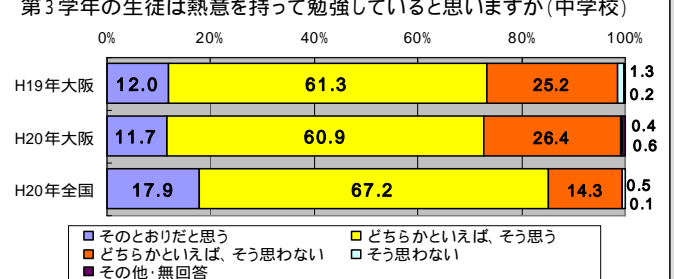
小学校



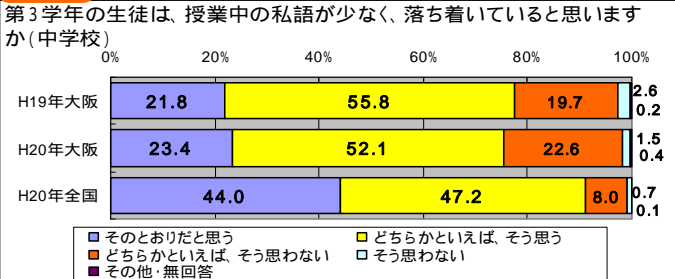
小学校



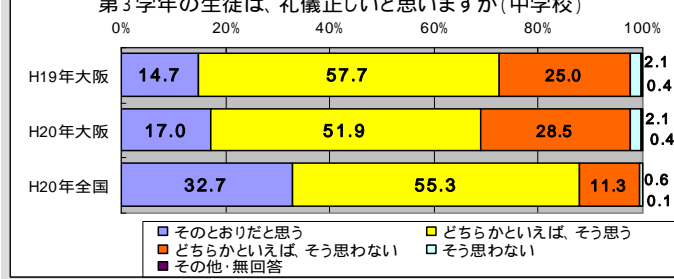
中学校



中学校



中学校

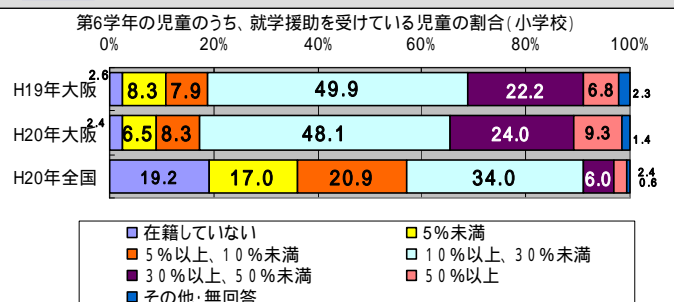


小中学校とも、就学援助を受けている児童生徒の在籍率の高い学校が多い

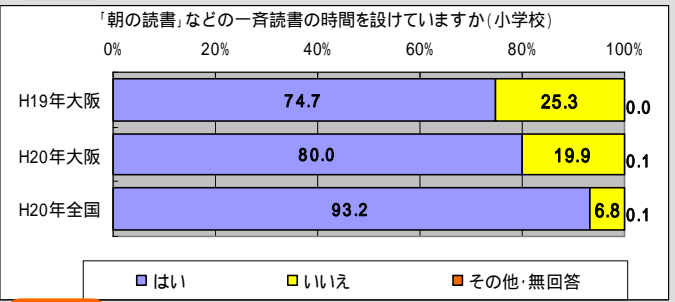
小中学校とも、「朝の読書」などの一斉読書の時間を設定している学校の割合は、全国を下回る

「放課後を利用した補足的な学習サポート」の実施は、中学校では全国を上回る

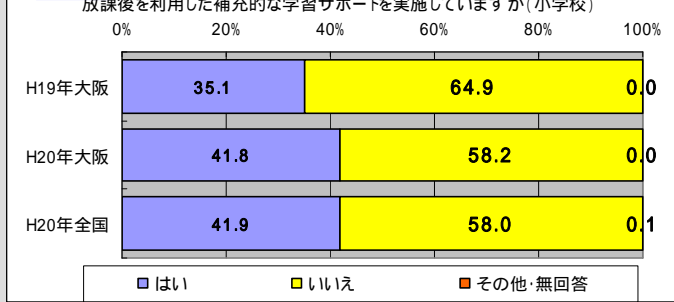
小学校



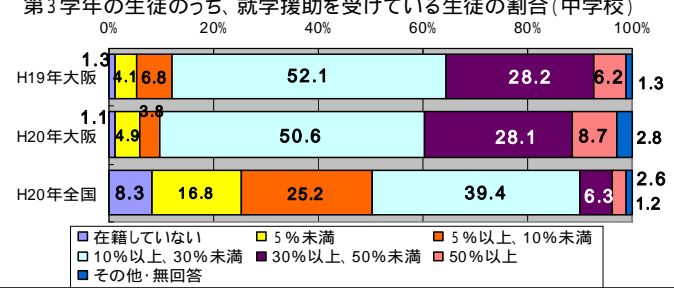
小学校



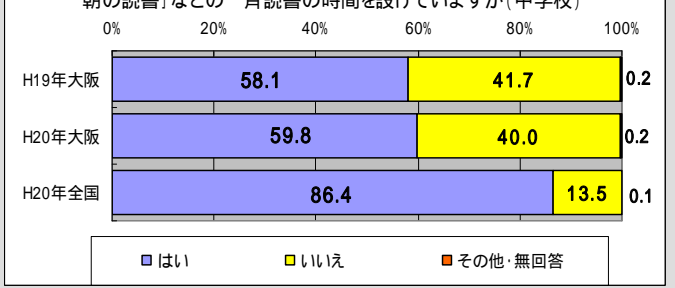
小学校



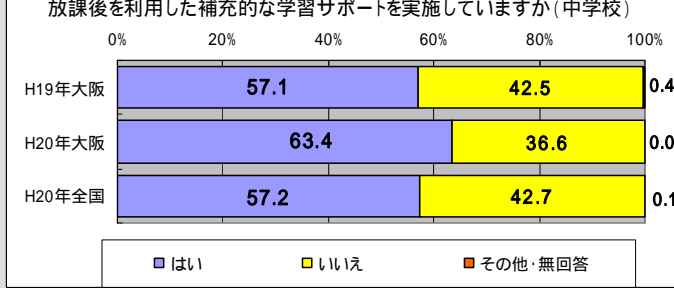
中学校



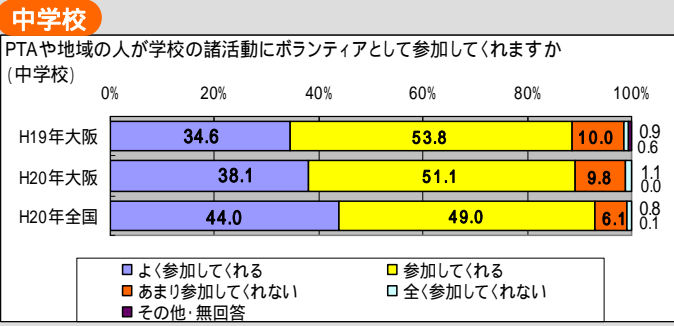
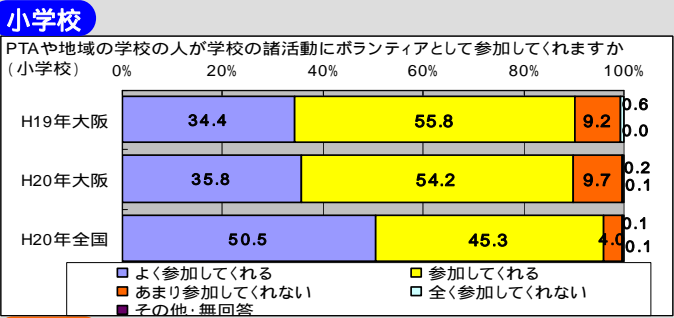
中学校



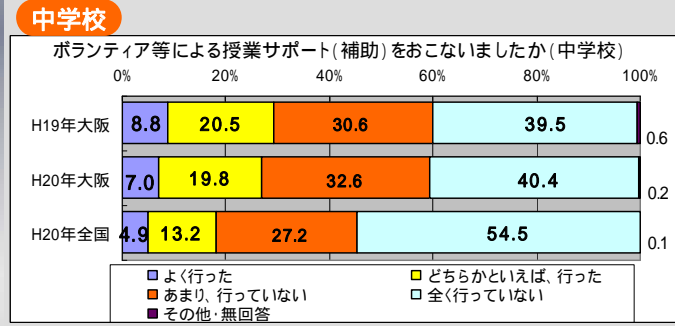
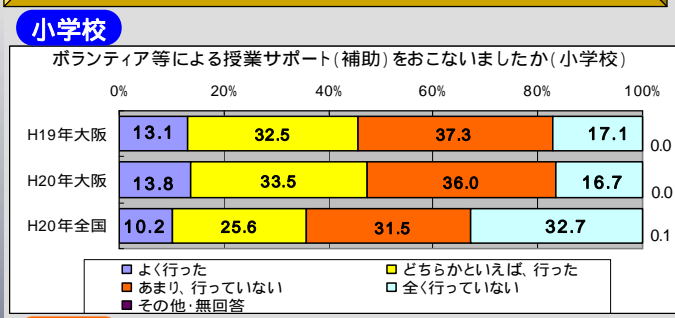
中学校



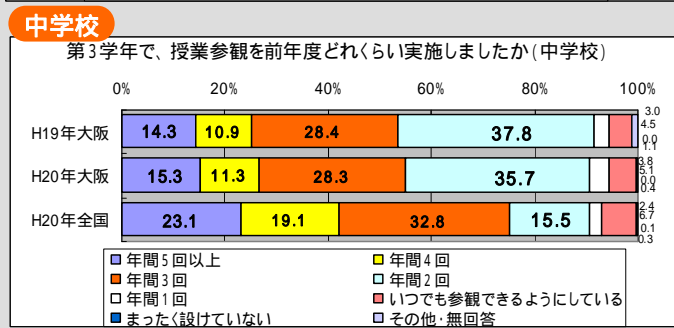
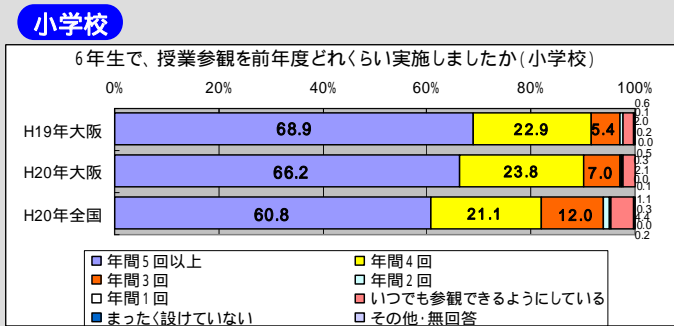
PTAや地域の人々の学校の諸活動に対するボランティアとしての参画状況は、小中学校とも全国を下回る



ボランティア等による授業サポート(補助)の実施状況は、小中学校とも全国を上回る



前年度に実施した授業参観の回数は、小学校においては全国を上回るが、中学校においては下回る。



前年度における、授業研究を伴う校内研修の実施回数は、小中学校とも全国を下回る

